

前号でご紹介した対談シリーズの二環として、3月に京都で樂焼の第15代吉左衛門さんとの対談が実現した。一樂・二萩・三唐津といわれるくらい茶道と縁が深い樂焼の、当代だけあって、その日本文化への造詣の深さは並大抵のものではない。茶道とともに能についての素養も深く、まさに日本の伝統文化の広さと深さを学ばせていただいた。

対談の話題はさまざまな方面に及んだが、当然ながら樂焼の初代長次郎、とりわけ樂家の伝統となった黒樂、中でもその銘品「大黒」が常に二人の念頭から離れることはなかった。なぜ茶碗は黒なのか。千利休からそれまでの華やかな茶碗とは異なる、詫び、さびを

新美術 時評

近藤誠一

っちゃん、これ黒ちゃうねん」と言ったという話を紹介された。

大人は、黒樂は樂焼の本流だという知識をもっている。だから黒樂ばかりが並んでいても不思議に思わない。「自分は知っている」から「何故黒なのか?」という「素人っぽい」質問はしない。黒だと

表す茶碗を求められた長次郎が行き着いたのが、すべての色を削ぎ落した黒であった。しかしそれは単に墨を塗ったようなのっぺらぼうな黒ではない。その表面の細かい隆起をもつ肌合いと、そこから発する様々な光からは、ほぼ無限の色と、そこに秘められた膨大なエネルギーが湧いて、あっという間に観察者を包む。

その深い味わいを理解するには、観る者の心の在り方が重要になる。樂さんは、ある京都での展示会を訪れた子供が、そこにあるのが黒樂ばかりなのを知って、何故なのかと素朴な疑問を呈したと、そしてその後別の子が、「お

決めているから、その微妙な色合いに気づかない。気づいても大人はそれをただの黒だと言いくるめてしまう。

改めて何故長次郎は黒にたどり着いたのか、彼をそこに導いた詫び、さびとは何なのかを考えねばならない。そこでヒントになるのが、すべての色を削ぎ落した拳句の黒だという点だ。よく日本文化の本質は、削ぎ落しの文化、引き算の文化であると言われる。美しく、意味ある形や色をどんどん削ぎ落していった先に、本当の美を

みる。西欧的見方からすれば、逆説的であり、矛盾である。だがそここそ自然の奥深さに対する純粋な感性をもち、人為的・皮相的であることを極力避けようとする、日本人独特の思想があるのではないか。樂さんは「徒然草」の「花は盛りには、月は隈なきをのみ、見るものかは。雨に対(むか)ひて月を恋ひ、垂れこめて春の行衛(ゆくへ)知らぬも、なほ、あはれに情(なごけ)深し」(137段)や、世阿弥の「花伝書」の「一方の花を極めたらん人は、萎れたるところをも知る事有るべし、しかれば、この萎れたると申すこと、花よりのまほ上の事に申しつべし」を引用された。

これが日本人の美意識であり、物質主義や科学合理主義が主導する現代社会において、日本人の原点として忘れてはならないことだ。しかしそれはことさら意識し「計算」してできることではない。自然で、固定観念から自由な精神をもつば、自ずと心に湧いてくるはずだ。

そのことを教えてくれたのが、樂さんが言及された子供の反応である。「これ黒ちゃうねん」。日本人の原点再確認にとって、「知識」や大人社会の「決めつけ」から自由な子供の発想は極めて大切だ。(対談シリーズを主催する法人のホームページ <https://takumi-artdijapon.jp>)

(元文化庁長官)

近藤文化・外交研究所代表

削ぎ落した後の美